

野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

アミガサユリ *Fritillaria thunbergii* Miq. (=*F. verticillata* Willd. ver. *thunbergii* (Miq.) Baker) (ユリ科 Liliaceae)

連絡先：城西大学薬学部生薬学教室
shiratak@josai.ac.jp

ようやく、寒さも緩み、春の気配が漂う弥生、早々と土中から顔を出すのがアミガサユリ（編笠百合）です。本植物は中国を原産とし、今ではいくつもの種が観賞用として栽培される高さ 30～80cm の多年草で、葉は長さ約 10cm、3～5 枚輪生し、線状披針形で無柄、上部の葉は先端が鍵型に曲がり、花は数個を茎頂に下向きにつけ、花被片は淡黄緑色で 6 個、花径約 3cm の鐘状花で、内側に黒紫色の網目状斑紋があり、夏には茎葉とも枯れてしまいます。和名は花の形を、虚無僧のかぶる「深編笠」や、お姫様やお遍路さんがかぶる「編み笠」にたとえたもので、埼玉県小川町には、「笠山」（標高 837m）とよばれる編み笠にとてもよく似た山容の山があり、登山者にとても人気です。地下にある鱗茎は 2 枚が貝状に相対して、鱗片が割れて中から球根が出てくる様子を、母が子供を抱く姿にたとえてバイモ（貝母）とよばれます。また、2 個の鱗片は、クリに似ていることから、古くは「ハハクリ」とよばれていました。

鱗茎を剥がし、水洗いしながら外側のコルク皮を捨て、日干し、または石灰を塗って乾燥させた鱗茎は、バイモ（貝母, *Fritillariae Bulbus*）といい、鎮咳、去痰、排膿などを目的に滋陰至宝湯、清肺湯、当帰貝母苦参丸料などの漢方処方に用いられます。成分としては、鱗茎にステロイドアルカロイドの peimine (verticine), peiminosite, peiminine, peiminone などが報告されています。これらのアルカロイドには血圧降下作用が報告されていますが、一方、心筋を侵す作用があることから注意が必要です。中国に産する生薬のバイモには何種類もの *Fritillaria* 属植物を基原とするものがあり、それぞれ浙貝母、川貝母などとよばれ、そのうちアミガサユリを基原とするものは浙貝母



写真1 アミガサユリ

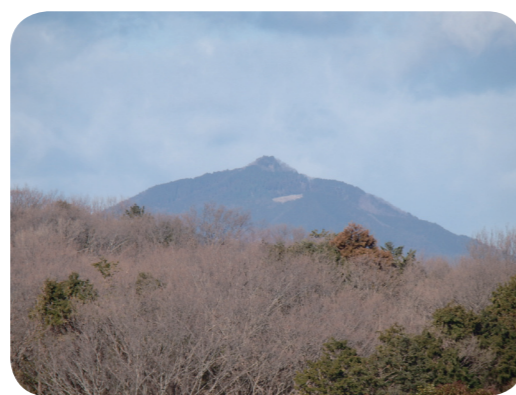


写真2 笠山 (埼玉県小川町)



写真3 クロユリ



写真4 生薬：バイモ (貝母)

といい、日本でも奈良県などで栽培され、大和貝母ともよばれています。また、生薬のバイモは鎮咳、去痰などを目的に用いられてきましたが、同名の生薬でも熱感があって痰のとれにくい咳嗽には浙貝母を用い、元気がない肺燥の咳嗽には川貝母を用いるとされています。

有名な高山植物にクロユリ *F. camschatcensis* がありますが、アミガサユリと同属です。クロユリは不吉な花とされていますが、クロユリにまつわる「黒百合伝説」を一つ紹介しますと、戦国（安土桃山時代）の武将、佐々成政〔(1536年 (1539年説あり)～1588年) には「早百合 (さゆり)」

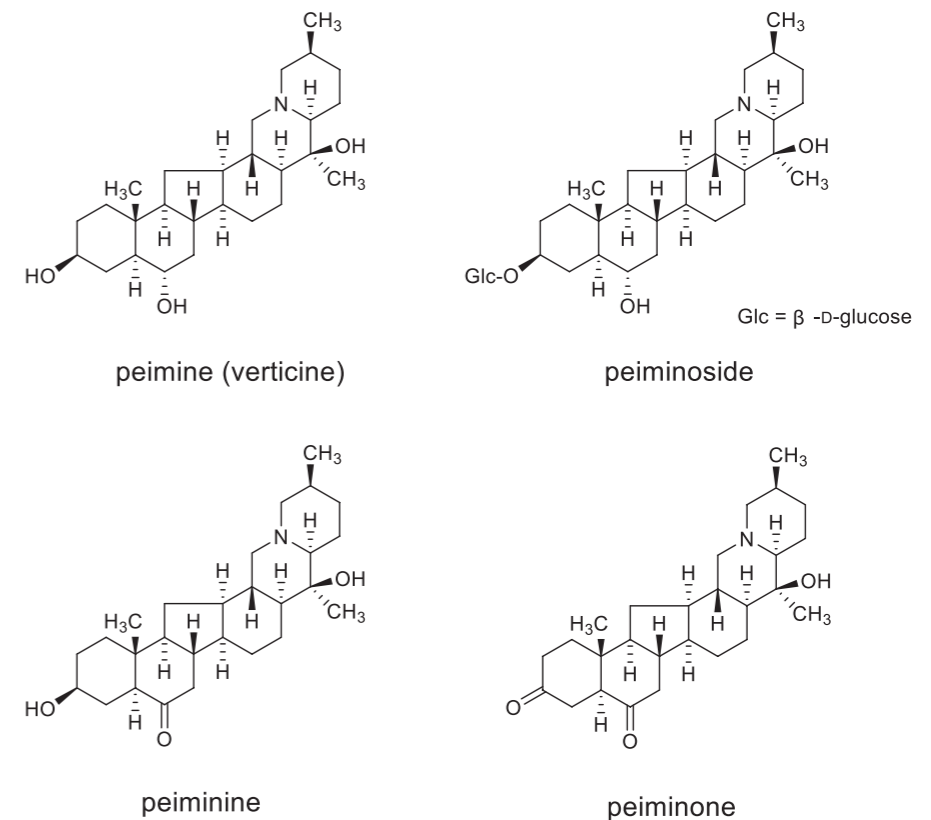


図1 成分の構造式

と言う美しい側室がいたとされ、成政はこの早百合を深く寵愛していました。それが嫉妬を招き、ある時、「早百合のお腹の中にいる子どもは成政の子ではない」と言う噂が流れ、成政はこれを聞いて大いに怒り、早百合を神通川の川沿で殺してしまったそうです。早百合は死ぬとき、「己成政、此の身は此処に斬罪せらるる共、怨恨は悪鬼と成り数年ならずして、汝が子孫を殺し尽し家名断絶せしむべし」と叫び、また、「立山に黒百合の花が咲いたら、佐々家は滅亡するであろう」と呪いの言葉を残して死んだとも言います。今も富山県富山市磯部町には、佐々成政の愛妾・早百合が榎えのきの下で斬られたと伝わる場所近くに、「早百合観音祠堂」や「磯部さくら」の碑があり、また、富山市五福の「呉服山長光寺」には早百合の家系の墓もあります。